



子育てに学ぶ おもちゃ（2）

乳幼児期のこどもたちは自分の周りを体験して人として生活する事を学んでいきます。ぐちゃぐちゃだった睡眠リズムが出来て、少しずつ大人と同じような時間帯を過ごせるようになると、衣食住が学びの対象となります。それらは日々繰り返されていくので、こどもにとっては格好の学びの種となります。食事を作ったり掃除をしたり洗濯をしたりという日常は大人にとっては退屈かもしれませんが、幼いこどもたちにとっては大人の動きが何かを生み出し変化させていくのですからこれほど面白いものはありません。その仕事を頭で思い浮かべただけでは何も変化しませんし見えませんが、大人が動くことで料理が出来たり洗濯物が綺麗に畳まれたりして、目に見えて自分の周りを変化していくのです。動くものに目を奪われる幼いこどもにとってこれだけ面白いものが他にあるのでしょうか。そこには働く人の手順等の考えが見え、匂いや音があって五感を磨いている幼児にはたまらなく魅力的で、こどもたちは同じことをしたくてたまらなくなるのです。これがごっこ遊びへの移行です。乳幼児期はまず初めに身体の使い方を覚えてそのものにただ触るという形で外の世界との関わりが始まります。外の世界のものを使うという段階に移行していきます。たっぴり自分の周りを観察体験してこそ自分なりに再現する、という遊びができるようになるのです。

私たちはおもちゃというと何か特別なものを想像します。しかし幼児期のこどもは日常を自分なりに真似できる素朴なものがあればいいのです。最初はお母さんやお父さんが日頃使っているものを欲しがって遊び、次に似たものを使って遊びます。ですからごっこ遊びには想像して遊びが再現できる素朴な布や石や木の実や紐や布や器などを用意してあげるとよいでしょう。

そしてそういうおもちゃもあふれるほど用意する必要はありません。欧州のどこかの幼稚園で（シュタイナー教育ではない）こどもが遊ばないのでたっぴりあるおもちゃをほとんど片付けたところ、ものすごく遊ぶようになった、という報告を聞いたことがあります。どんなにいいと思われるおもちゃも多すぎたら遊ばなくなってしまうのです。

もう一つ、私たち大人はこどもと遊んであげなくてもいい、という事があります。大人は大人の仕事をすることでこどもの遊びを刺激できます。誰かが遊んでくれるというのはこどもにとってとても楽しいことで、自分で工夫する力を削いでしまいます。自分で遊びを作れるよう、一時こどもが退屈していても大人は辛抱して見守りたいものです。遊んであげたくてたまらないおじいちゃんや私のようなおばあちゃんは特に気を付けたいですね。

今、こどもたちはバーチャルな世界にさらされています。周りにスマホがあり、大人がそれを見ていれば当然関心を持ちます。幼児に情報は必要ありません。でも大人の世界とこどもの世界を分けるとができなければすぐに夢中になるでしょう。自分は何もしなくてもただ見ていれば時間が経過していく世界では人は何の努力も工夫もいりません。そしてそこには本物は何一つないのです。本当の世界の体験が少ないこどもが将来どんな大人になるのか不安です。

何度も繰り返しますが、幼児は生活の中でしか学べません。見て触って再現して、自分の身体を育てて磨きます。身体的基础が出来て、初めて外の世界を知的に取り入れることができるようになります。

これらを実行するには大人のしっかりとした考えや行動が必要なのは言うまでもない事です。

（シュタイナーようちえん メルヘンこども園 教師 田上恵子）